

## 静嘉堂文庫蔵「つれく種」の正徹奥書の再検討

### ——『徒然草』の上下巻に潜む異質性——

小 枝 駿

#### 一、はじめに

正徹筆<sup>(1)</sup>とされる静嘉堂文庫蔵「つれく種」(以下、「静嘉堂文庫本」と略称)が一九三二年に川瀬一馬氏によつて発見せられて以降、数多くの研究がなされ、一九七四年には重要文化財に認定されるなど、現在に至るまで珍重されてゐるのは言ふまでもない。静嘉堂文庫本は、通行本で知られる烏丸本と比較すると、本文に相当の異文があるほか、通行本の章段で数へて第二三段が第四六段の次に位置してゐること、第三八段の中の一節が同段に、第一七九段の一節が第二三八段に重複してゐること、五箇所に及ぶみせけち私注が存する等の特徴がある。更に上下巻の末尾には書写年代と書写動機等を記した正徹による奥書があるといった特徴も有してをり、現存する『徒然草』の諸伝本の中では最も書写年代が古いことが、注目されて来たところである。

静嘉堂文庫本の特徴の一つである正徹奥書の解釈は、川瀬氏や大西善明氏によつてその基盤が形成されたが、それに対する反論等はなされず現在に至つてゐる。そのやうな正徹奥書について改めて論及する所以は、静嘉堂文庫本の奥書には上下巻には各々奥書が附さ

れてをり、且つ文言の異なる内容であるにも関はらず、先学諸氏が両者を同等同質の奥書として捉へてゐることや、そもそも奥書であるにも関はらず、上下巻の両巻に奥書が附されてゐることについて、疑念を抱かざるを得ないことに起因する。この点について触れた論者は管見の限りなされてゐないため、この疑念を念頭においた上で今日までの研究成果が果たして妥当と言へるかを、改めて検証する必要がある。

本稿は、静嘉堂文庫本の正徹奥書の解釈を再考することで、静嘉堂文庫本の上下巻に内在する正徹の書写行為の〈復元〉を試みるべく、その書写意識を改めて可能な限り読み解き、その読みの結果、どのやうな書写状況であつたかについて、ひいては室町期における『徒然草』に対する認識についての私見を呈示することをその目的とする。

#### 二、正徹本系統諸伝本の整理

まづ、現存してゐる正徹本系統の諸伝本と古筆切の一覧を整理する。

【正徹本系統の諸伝本一覧】（推定）書写年順）

① 静嘉堂文庫蔵正徹筆本（二〇五・一一・青）

\* 重文 \* 正徹奥書として、上巻奥書…「永享三年三月廿七日」、下巻奥書…「永享三年卯月十二日」とある。奥書については、三節にて詳述。

【影印】『正徹本 つれくゝ種』（国立国会図書館管理部、一九五二）、日本古典刊行会『正徹本 つれくゝ種』（日本古典文学刊行会、一九七二）、吉田幸一・大西善明編『正徹自筆本 徒然草（上）（下）』（笠間書院、二〇〇四）

【翻刻】垣内松三著、川瀬一馬校訂『つれくゝ種 正徹本』（文学社、一九三二）、川瀬一馬『徒然草』（『新註國文學叢書』講談社、一九五〇）、久保田淳『方丈記・徒然草』（『新日本古典文学大系 39』（岩波書店、一九八九）

② 龍谷大学図書館蔵平忠重筆本（〇二一・三三七・一）

\* 上巻のみ \* 「延徳二年（電集）庚戌八月日 平忠重本也」奥書（高乗勲氏「室町末期は下らないか」）

【翻刻】木村雅則「龍谷大学図書館蔵『徒然草 平忠重伝写本』翻刻」（糸井通浩編『日本古典随筆の研究と資料』（思文閣出版、二〇〇七）

【画像】「龍谷大学図書館 貴重資料画像データベース」

→ [http://www.afc.ryukoku.ac.jp/kicho/html/v\\_menu/0021.html](http://www.afc.ryukoku.ac.jp/kicho/html/v_menu/0021.html)

③ 東海大学付属図書館中央図書館桃園文庫蔵天文本（桃・一九・六）

\* 付箋に「天文写本」とあり ↓ 存疑

④ 東海大学付属図書館中央図書館桃園文庫蔵浄林本（桃・一九・一四）

\* 室町中期写 \* 上巻奥書…「此一帖眞光寺より御譲候以来又拙子より宗賢公へ相譲可申候仍如件」、下巻奥書…「此草子上下巻眞光寺ヨリ御譲候又拙子ヨリ宗賢公へ相譲可申候仍如件／慶長二年より天保五年まで貳百三十八年に成る」（両冊とも、慶長二

年卯月廿五日）の浄林奥書 \* 大島雅太郎旧蔵本

⑤ 陽明文庫蔵本

\* 室町中期写で訂正校合は近衛（三藐院）信尹の筆と見る説（高橋貞一『枕草子 徒然草（陽明叢書）解説』と、室町後期写で訂正校合は近衛前久と見る説（高乗勲『徒然草の研究』）がある。松尾聡氏は「天文を下らざる頃か」（『正徹奥書本以前の徒然草』（『文学』一九三二・七）と述べる。

【影印】『枕草子 徒然草』（『陽明叢書国書篇』第十輯（思文閣、一九七五）

⑥ 大妻女子大学図書館蔵和廣筆本（九一四／四五／Y八六―一二―／一〇二）

\* 「永禄六年癸亥三月日 和廣」奥書

【影印・翻刻】大妻女子大学国文学会『徒然草』（『大妻文庫1』（新典社、二〇一一）

⑦ 東海大学付属図書館中央図書館桃園文庫蔵藍表紙本（桃・一九・八）

\* 室町後期写 \* 大島雅太郎旧蔵本

【影印】『徒然草1』（『東海大学蔵 桃園文庫影印叢書』第八巻（東海大学出版会、一九九二）

⑧ 叡島神社野坂家蔵抜書本

\* 室町末期 \* 抜書本（上巻から六五、下巻から一五の章段を抄出） \* 松永信一「徒然草写本の研究」（『広島大学教育学部紀要 第二部』一九五三・四）、「野坂家本つれづれ草の再吟味―下巻の紹介をかねて」（『金城国文』一九六八・八）に詳しい。

⑨ 国文学研究資料館蔵宝玲文庫旧蔵打曇表紙本（八九―一三一―／二）

\* 高乗氏「室町末期写で陽明文庫本とほぼ同時期か」 \* 高乗勲氏旧蔵本

⑩ 「異本徒然草」

\* 室町末期写 \* 『弘文社待賈古書目 13』（一九三九・六）、「(48) 徒然草 足利末期頃古寫本 全三冊」 \* 「たづの大臣殿」が第四六段の次にあり、また静嘉堂文庫本

のみにある百余字の語句があるなど、正徹本系統と一致した箇所を有するといふ。

\* 所在不明

### ⑪ 落合博志氏所蔵本

\* 『古典籍展観大入札会目録』(二〇一五年一月)には室町末期とあるが、江戸初期写か。 \* 下巻のみ \* 『古典籍展観大入札会目録』に「35 異本徒然草」とある。

### ⑫ 叡山文庫蔵本

\* 奥書に「這上下二冊就去人所望加一覽次僻字落字等札正之但有遺漏之過者後君子以勿憚改矣／慶長歲舍<sup>寅</sup> 蜡月念五独对雪窓手敲凍硯聊記之耳／也足軒素然」とある。

\* 桑原氏によると、「慶長期の書写本そのものではなく、のちの転写本である」といふ。 \* 下巻のみ

### ⑬ 異本徒然草抄出

\* 慶長期写 \* 『三越古書目録』(一九六九・五)、「58 異本徒然草抄出 慶長頃写 正徹本系 一卷」

\* 所在不明

### ⑭ 八坂神社蔵本〈上巻〉

\* 慶長期写 \* 上巻は正徹本系統、下巻は幽斎本系統

### ⑮ 東洋文庫蔵岩崎文庫旧蔵本〈上巻〉〔貴V II—二—D—b—八〕

\* 慶元期頃写 \* 上巻は正徹本系統、下巻は幽斎本系統

### ⑯ 神宮文庫蔵本

\* 承応二年正月の黙拱子奥書 \* 静嘉堂文庫本上巻奥書あり

### ⑰ 蓬左文庫蔵本〔一〇七—二二〕

\* 江戸初期写

### ⑱ 中田光子氏所蔵本〔ナ三—一—二〕

\* 書写年代不明 \* 国文学研究資料館蔵マイクロフィルム

正徹本系統の諸伝本を整理するにあたり、鈴木知太郎氏の「徒然

草諸本解説」(山田孝雄『つれづれ草』(宝文館、一九四三)付載)、『国語国文学研究史大成』(三省堂、一九六〇)、高乗勲氏の『徒然草の研究』(自治日報社、一九六八)、桑原博史氏の『徒然草研究序説』(明治書院、一九七六)、齋藤彰氏の『徒然草の研究』(風間書房、一九九八)、国文学研究資料館編『田安德川家蔵書と高乗勲文庫—二つの典籍コレクション』(臨川書店、二〇〇三)等を参考した。

近年発見された正徹本系統の写本は、⑥大妻女子大学図書館蔵和廣筆本(以下、「大妻本」と略称)<sup>(2)</sup>、及び⑪落合博志氏所蔵本(以下、「落合本」と略称)の二点存するが、本稿では特に落合本について注目する。以下に、落合本の書誌情報を記す。

列帖装一帖。縦二五・〇糎×横一九・五糎。表紙は青緑色無地。題簽が表紙左に貼られ「異本 徒然草 下冊」と墨書される(本文と別筆)。書写年代は江戸初期か。本文料紙は鳥の子紙。内題等なし。一面八行書。紙数は以下の通り。

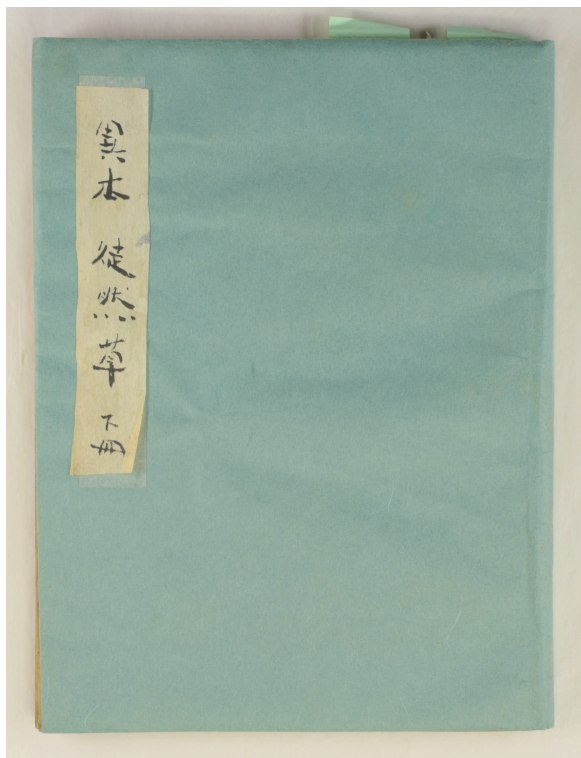
一括り・一〇葉 二〇丁(遊紙一丁、墨付一八丁、一丁目オモチは前表紙側)

二括り・九葉 一八丁(墨付一八丁)

三括り・九葉 一八丁(墨付一八丁)

四括り・九葉 一八丁(墨付一八丁)

五括り・九葉 一八丁(遊紙五丁、墨付二一丁、八丁目は九丁目に糊付され、九丁目ウラは裏表紙側)



(落合本、前表紙)

段分けはなされてゐないものの、随所の改行より段の区切りにより判別可能。第二二三段「たづの大臣殿」はなし。第二三八段に第一七九段「其のひじり申されしは」の一節が重出。みせけち私注は第一五一一段末尾に「此段本ハみせけちなれとも私記之」、第一六九段末尾に「此段みせけち也私書之」とあり。

落合本は、二〇一五年一月の東京古典籍展観大入札会（東京古典会主催）にて「34 異本徒然草」として出品された後、落合博志氏の所蔵となつた写本である。同年月発行の『古典籍展観大入札会目録』には室町期写とあるが、一見したところ、おそらく江戸初期の写しかと思はれる。未だ詳細な本文研究がなされてをらず、詳述することとは叶はないが、今後の研究が期待される写本の一つである。

【正徹本系統の古筆切】（推定）書写年順

1 田中登氏所蔵伝足利義視筆四半切

\* 室町中期写 \* 藤井隆・田中登『国文学古筆切入門 100』（和泉選書、一九八五）

2 舟見一哉氏所蔵伝足利義視筆四半切

\* 室町中期写 \* 舟見一哉「伝足利義視筆『徒然草』の古筆切をめぐる」（『汲古』二〇一〇・六） \* 1 のツレ

3 日比野浩信氏所蔵伝道興筆徒然草切

\* 室町中期写 \* 日比野浩信による記事「何かを伝えたくて——道興筆徒然草切——」

↓ <http://www.d1.dion.ne.jp/~kochuten/seisei15.html>

4 石澤一志氏所蔵伝下冷泉持為筆徒然草切

\* 室町中期写 \* 石澤一志「『徒然草』の古筆切」（『国文鶴見』二〇一七・三）

5 伝杉原宗伊筆徒然草切

\* 室町後期写 \* 『京都古書組合総合目録』12号（小林強「出典判明仮名散文関係古筆切一覧原稿」（『人文科学（大東文化大学）』二〇〇七・三）参看）

6 日比野浩信氏所蔵伝杉原伯耆守筆徒然草切

\* 室町後期写 \* 5 のツレであるといふ（石澤一志「『徒然草』の古筆切」（『国文鶴見』二〇一七・三）

今日まで『徒然草』諸伝本研究やその解説では、“書物”や“冊子”としての形態で伝来して来たものが主な研究対象とされてきたやうに思ふ。よつて本稿では、正徹本系統と思される古筆切を、新出資料とあはせてここにまとめることとした。

近年所在が判明した正徹本系統の古筆切は 3、4、6 の三点存す



る。本稿では特に、3日比野浩信氏所蔵伝道興筆徒然草切と、4石澤一志氏所蔵伝下冷泉持為筆徒然草切に注目したい。

伝道興筆徒然草切は、二〇〇八年六月に日比野氏が電子掲載し、紹介された、日比野氏によれば、縦二二・二糎×横一四・四糎、一〇行で、第二一七段末尾から第二一八段が記されてをり、「是はみせけち也私書也」といふみせけち私注が記されてゐる。みせけち私注を有してゐる伝本は、正徹本系統の中でも半数ほどであるといふ実状を鑑みれば、正徹本系統の研究において重要な意味を持つ資料であると言へる。

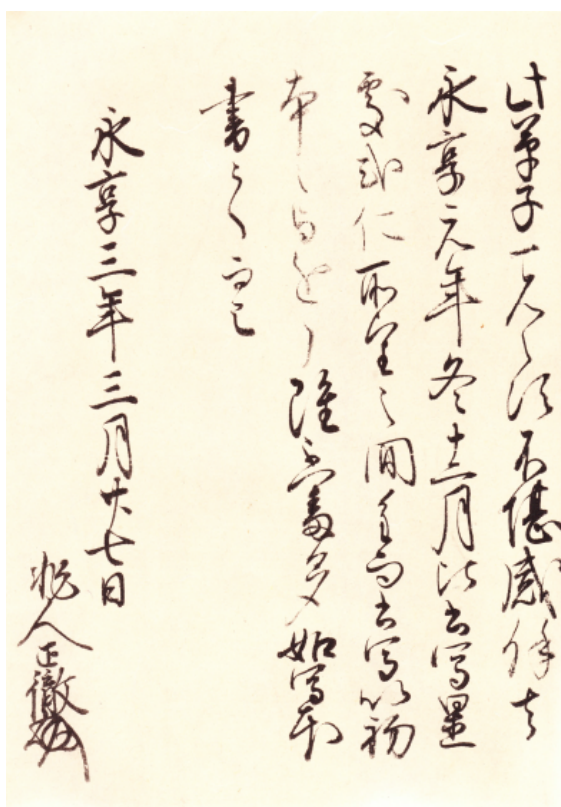
伝下冷泉持為筆徒然草切は、石澤氏のご厚意により一見した古筆切である。縦二七・〇糎×横二一・三糎、一面一五行で、第二五段末尾から二七段冒頭が記されてをり、朱合点や丁付けがある。特徴としては、静嘉堂文庫本の一面行数と一致し、紙の大きさもほぼ一致してゐること、更には丁数が一致してゐることなどが挙げられる。従つて、静嘉堂文庫本をできる限り忠実に模写した写本であつたのではなからうかと考へられる。なほ、『徒然草』の古筆切新出資料の詳細な分析については、石澤氏の『「徒然草」の古筆切』（『国文鶴見』二〇一七・三）を参看されたい。

### 三、正徹奥書の解釈への途

「つれく種」に存する正徹奥書の解釈を試みるために、まづは上巻と下巻各々の奥書を確認したい。以下は、『正徹本つれく種』（日本古典文学刊行会、一九七二）の図版、及びその釈文である。また、

傍線及び読点は私意によるものである。傍線は、上巻と下巻で共通する箇所に、それぞれ対応する線を附した。

#### ●上巻奥書



(上五七丁オ)

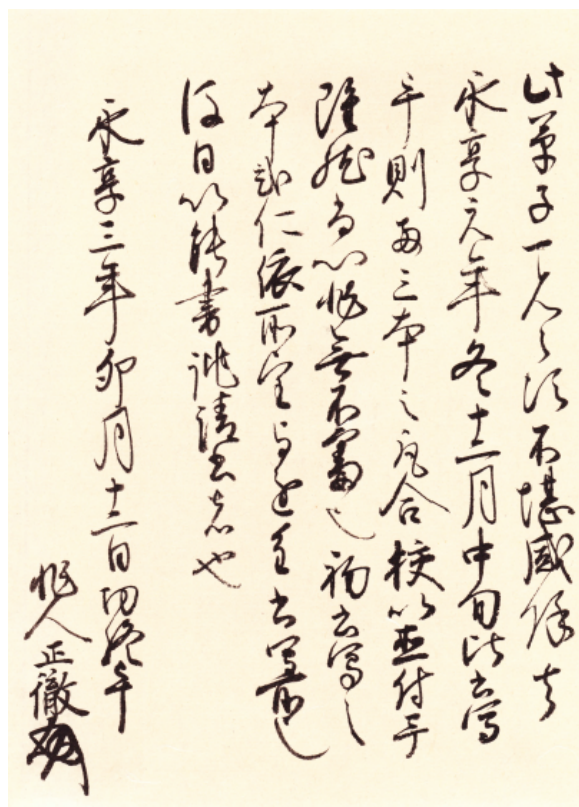
此草子一見之次、不堪感餘、去  
永享元年冬十二月比書写置

處、或仁所望之間、重而書写、以初  
本令<sup>(3)</sup>与進了、不審雖多、如写本  
書之而已

永享三年三月廿七日

非人正徹（花押）

●下巻奥書



(下四八丁オ)

此草子一見之次、不堪感餘、去

永享元年冬十二月中旬比書写

畢、則両三本之取合校以直付畢、

雖然尚以非無不審也、初書写之

本、或仁依所望与進、重書写所也、

後日以能書詔清書者也

永享三年卯月十二日功終畢

非人正徹(花押)

以上の正徹奥書をまとめると、以下のやうになる。

- (1) 正徹は親本を一見して「不堪感餘」と感激したため、永享元年書写本(以下、初度本)を書写した。(上/下)
- (2) その本は「或仁」の所望により手放さなければならなくなった。(上/下)
- (3) 正徹は再度書写をし、それが永享三年書写本(以下、再写本)であり、現静嘉堂文庫蔵の所謂正徹本である。(上/下)
- (4) 正徹が参看し得た『徒然草』の諸本を以て校合し、本文の校訂を行った。(下)
- (5) 上下巻ともに、不審な箇所が多数残るものであった。(上/下)
- (6) 書写校合の後、能書家に清書を依頼することになった。(下)
- (7) 下巻の書写に要した日数は、上巻を書写してすぐに下巻の書写作業に移ったと考へた場合、大体二〜三日間であった。(上/下)

しかし本奥書には、右記のやうな直ちに読み取れる事柄に留まらぬ、より重要なことが含意されてゐると考へられるので、その点に着目し新たな解釈を試みる。

## 二一、正徹奥書の表現意識を探る

まづ外形的な表現について、正徹の表現意識を一つずつ確認していく。

上下巻に共通する「此草子一見之次」とは、『徒然草』全体を一読したことを指してゐる。その次に「不堪感餘」とあるが、これは『徒然草』といふ作品そのもの、特に中世的美意識に立脚した兼好の言及や、『枕草子』を継ぐ作品であること等に対し感激して「書写」したため、その旨を書いたのであらう。このことは、『正徹物語』の上巻である『徹書記物語』に、「花はさかりに、月はくまなきのみ見るものか」と、兼好が書きたるやうなる心根を持ちたる者は、世間にただ一人ならはなきなり。（中略）つれづれ草のおもぶりは、清少納言が枕草子の様なり。」、また下巻の『清巖茶話』には、「つれづれ草は、枕草子をつぎて書きたる物なり。」とあることから推察できる。なほ、「つれづれ種」奥書によれば、初度本は一四二九年に成立し、一方『徹書記物語』は翌年の一四三〇年に成立してゐる。その時間的空白は相当短いものであるからして、初度本を書写した時点で正徹が『徒然草』に抱いた感激と、『正徹物語』で顕にした『徒然草』への感情は同義である考へられるため、『正徹物語』における『徒然草』への言及は、奥書に遡及できると捉へてもよいであらう。

文言は若干異なるものの同一の内容として、「或仁所望之間、重而書写、以初本令与進了」（上巻）、「初書写之本、或仁依所望与進、重書写所也」（下巻）とあり、正徹が初度本を書写した後、「或仁」の「所望」により、『徒然草』を「重而書写」し、「初本」（四一）にて詳述を「与進」したことについても、同様に上下巻ともに記されてゐる。

一方、奥書には共通しない箇所もある。初度本の書写年月につい

て、上巻では「永享元年冬十二月比」とあるのに対し、下巻では「永享元年冬十二月、中、旬、比」とあるやうに、下巻はやや詳細になる。再写本である静嘉堂文庫本の書写時期については、上巻では「永享三年三月廿七日」、下巻では「永享三年卯月十二日功終畢」となつてゐる。上巻には「功終畢」がなく下巻にあるのは、正徹が上巻奥書を記した際、下巻を意識した表現であるとともに、上下巻一具であることを認識した表現であることが窺へる。更に書写態度については、上巻には「如写本書之而已」とある一方で、下巻には「則両三本之取合校以直付」とある。上巻では写本の如く書写した結果不審な箇所が多く、対する下巻では校合したが不審がないわけではないとしてをり、表現の比較をすると、上巻の方が下巻よりも「不審」な箇所が多いことが読み取れる。

以上のやうに、正徹は「つれづれ種」奥書を書く際、上下巻ともに共通することがあれば、奥書の釈文に示した傍線の如く、内容を重ねて書き、逆に異なる点については上巻と下巻各々に異なる記載するといふ意識が垣間見えるのである。

### 三二、正徹奥書の通説批判

正徹が藤原定家への崇拜から、正徹奥書においてもその風骨を模倣してゐることは、先学により既に指摘されてゐるところである。川瀬氏によれば、正徹奥書の一文目に相当する「此草子一見之次不堪感餘」は、定家筆『土左日記』奥書にある「不堪感興」を模してをり、「非人正徹」といふ書きぶりも、定家の『源氏物語奥入』にあ

る「非人桑門明靜」に学んだのであらうことを述べてをられる<sup>(4)</sup>。

また、「正徹が本書々寫の際に於ける假名文字遣に就いても、定家假名遣に従つてゐる事は容易に首肯し得る處である」とも述べてをり、これらの川瀬氏の言及は今日まで引用されてきた。「つれ／＼種」の書写においても、例に漏れず定家の影響の程度が甚だしいことは、今日までにおける先行研究の共通認識と捉へて間違ひない。

このやうに、正徹の中に定家の幻影を見出だすことは表面的な表現レヴェルでならば可能であるが、当時の書物の所蔵実態を鑑みると、今日までの通説は決して看過できない実状を孕んでゐる。

室町期においては、冷泉家の典籍を冷泉家以外の人間が読み、写したことが確実に言へる事例は、極めて少ない。その数少ない事例の一つとして、一条兼良が定家の『明月記』を抄出した『明月記歌道事』が挙げられるものの、それはあくまでも例外的な事例であつて、基本的には冷泉家の人々が書写したものが世に広まつたことで知られる。冷泉家の本が近世初期に禁裏によつて組織的に書写されて以後、冷泉家に所蔵されてゐた孤本が初めて流布していったといふ事例は『代々御集』をはじめ多々あるが、中世では外部の人間が簡単に閲覧し、書写することはほとんど出来なかつたであらうと推測される。

さて、そこで定家自筆『奥入』は、中世に冷泉家で作成された目録類にその名が見える。例へば、時雨亭文庫蔵『家伝書籍古目録少々二通』甲（第五紙）には、

〔京極殿之〕 金槐和哥集

安嘉門院百首

〔同〕 奥入

と見え、同様の記載は『家伝書籍古目録少々二通』乙、『家蔵書目録』等にも見える。安土桃山から江戸初期の蔵書状況を窺はせるものと考へられてゐる時雨亭文庫蔵『冷泉家蔵書目録龍曲蔵』（第二紙オ）には、

奥入（一冊定家卿御筆也）

とあるので、いかにも現物を確認した上での記述のやうに看取されるのである。さうであるからして、正徹が『奥入』を実見してゐたとは考へづらい。

この「非人」の書きぶりは、定家よりも寧ろ、明恵やその高弟の高信に求めるべきである。僧侶が奥書で「非人」を使用する用例は非常に少なく、管見の限りでは、明恵や高信らが使用してゐることが分かつてゐる<sup>(5)</sup>。正徹が彼らに関する著作を享受してゐたかどうかについては定かでないが、高山寺には明恵や高信らの典籍を数多く有してゐることから、正徹が彼らの書きぶりを模倣したと考へる方が、『奥入』の書きぶりに比して蓋然性は高いと言へる。

次に、定家自筆『土左日記』の奥書からの影響を考へたい。『土左日記』だけでなく定家自筆本といへば、中世にあつてはこの上なく

神聖視され、それを所蔵する者は容易に披見したり伝授したりすることはなかつたこと、そして冷泉為秀の歿後、『土左日記』は佐々木高秀の手に渡つてゐたことは、既に堀部正二氏によつて論究されてゐる<sup>(6)</sup>。従つて、いくら正徹であつてもその目にも触れることが難しかつたであらうことは想像に難くない。また「不堪感」といふ表現は、多数の古記録等でその表現が使はれてをり、定家ただ一人に求められる表現ではない。

さういふ種々の事情から、正徹が「つれ／＼種」奥書を定家の書きぶりに学んで記したなどといふ言及を、安易に肯首することはできない。従つて、少なくとも「つれ／＼種」奥書においては、今日までの、定家から影響を受けた正徹といふビジョンは虚像と化し、正徹の中の定家像をそこに求めることは、困難と言はざるを得ないのである。

### 三―三、上下巻奥書と本文に介在する齟齬

奥書に記されてゐることをもとに、静嘉堂文庫本の本文全体を見直すと、静嘉堂文庫本には上巻と下巻の各々に齟齬が生じてゐることが分かる。書写された本文の実態と、本文書写後に書かれたであらう奥書に記されてゐる内容には、明らかな相違があるのである。

上巻奥書には「雖不審多如写本書之而已」、つまり不審は多いが忠実に「写本」の通り写したといふ旨が記されてをり、下巻には「則両三本之取合校以直付」、つまり「両三本」の諸本を以て取り合はせ校合して直し付けた旨が記されてゐる。奥書通りに解釈すれば、上

【表1】 静嘉堂文庫本における書き入れ箇所

① 本文と同筆の補入	② 漢字のよみがな	③ 漢字をあてた例	④ 本文と同筆のみせけち	⑤ 「本ノマ」のやうな注記	⑥ 「或本」・「イ」といふ校合	⑦ 漢字の訂正
二八ヶ所	二ヶ所	一ヶ所	一六ヶ所	七ヶ所	二ヶ所	一ヶ所
一五ヶ所	二ヶ所	ナシ	二三ヶ所	四ヶ所	ナシ	一ヶ所
【二三段】 何門などは。みしともきこゆへし	【二八段】 倚廬 <sup>イロ</sup>	【三三段】 けんき門院 <sup>キ</sup>	【四七段】 なにことをかくはかくはの給そと	【六三段】 とせのさうは <sup>本ナマ</sup>	【六六段】 枝のなかさ七尺／石をつたひて <sup>或本 六尺</sup>	【七五段】 摩訶止觀 <sup>モカシカン</sup> にも待めれ
【具体例】						

（桑原博史『徒然草研究序説』（明治書院、一九七六）、二〇三―二〇四頁を基に作成）

巻は「写本」の如く書写したが、下巻は書写した上で校合したことになる。しかし、実際の本文ではどのやうになつてゐるかといふと、正徹が校合し直し付けたと思しき痕跡は、【表1】の⑥に示したやうに、上巻第六六段に二箇所あり、対する下巻には校合の跡が見受けられないのである。

上巻は校合せず、下巻のみを校合したと奥書通りに解するのは不自然に思はれるためか、これまでの先行研究では、下巻の奥書にある校合の対象は下巻のみならず上巻にも適用されると解されてきた。鈴木知太郎氏は「親本たる永享元年の寫本に試みられたりし所謂「両三本」との校合は、此本に於いては取捨して本文に入入れられしものとみるべきが如し。」<sup>(7)</sup>、桑原博史氏は「両三本による校合」は、奥書にあるやうに永享元年書写本には加へられたかも知れないが、

現存の永享三年書写本には完全に伝えられたとは言えない、両本はその点では別々の原本となり得るといふことになる<sup>(8)</sup>、吉田幸一氏は「正徹本は二本以上のつれづれ草の先行本を綜合編集したものであるといふことになる」<sup>(9)</sup>と各々見解を述べてをられる。しかし仮に校合が上下巻ともになされてをり、且つ鈴木氏が述べるやうな校合の取捨が行はれてゐたとすると、校合の跡が上巻に二箇所、下巻には零箇所といふ静嘉堂文庫本の書写実態は、些か不自然である。

一方で大西善明氏は本文の誤脱の状況から、「両三本云々」は疑わし<sup>(10)</sup>と先の諸氏とは異なつた見解を示したが、正徹が奥書に虚偽を記す事由は考へられない。

それではいかにして整合性を図ることができらうか。

#### 四、正徹の書写意識と、上下巻奥書の再攷

正徹奥書の文言をまづはそのままに受け取ると、先のやうな矛盾が生じてをり、更に本来ならば書誌の最後に記されるはずの「奥書」が、「つれづれ種」では上下巻両巻末に記されてゐる。以上二点を踏まえると、上巻と下巻を峻別することを前提として考察すべきである。そこで、上巻奥書の解釈と下巻奥書の解釈を各々試み、「つれづれ種」の書写実態と、そこに内在する正徹の意識を読み取つてみたい。

#### 四―一、上巻奥書の解釈

上巻奥書には「如写本書之而已」とあり、これは「写本」の通りに書写し再写本を成立せしめたといふことを意味してゐるわけであるが、さうであるにも関はらず、第六六段には「或本」と「イ」の二箇所の校合の跡がある。「或本」といふ校合の跡は、大妻本を除く全ての写本に存在し<sup>(11)</sup>、「イ」といふ校合の跡も神宮文庫本や陽明文庫本などにあり、少なくともそれらは静嘉堂文庫本とは親子関係ではないであらうと思はれる写本に存在する<sup>(12)</sup>。このことから、上巻本文に残つてゐるこれら校合の跡は、正徹が書写する以前から附されてゐた校合であることが分かる。さうであるとなると、上巻奥書で「如写本書之而已」と記されてゐることが虚偽ではないとすれば、第六六段にある「或本」や「イ」といふ校合の跡は、親本には既に記されてをり、正徹による校合の跡ではないと考へるのが妥当である。よつて、上巻は正徹の手が加はつてゐない写本であると見るべきである。

更に、「写本」の解釈も考へてみたい。先行研究では、「写本」は再写本の一段階前に書写した本、つまり初度本を指すとされてきた。下巻奥書で示されてゐる校合は上巻本文にも影響を与えてをり、その結果が先に挙げた二箇所の校合であるといふ読みは、「写本」が初度本を指すことが前提となつてゐるのである。なぜならば、鈴木氏の述べるやうに、初度本の校合を取捨選択したのが再写本といふことは、既に校合本としての『徒然草』が成立してゐるといふ前提に立つものであつて、当然校合されてゐるのは親本ではなく、初度



本に相違ないからである。「写本」が初度本を指すと解すると、先に示した親本を書写した初度本（上巻）は校合されてゐないといふ読みの根拠は消える。それはすなはち、「両三本」で初度本の上下巻を両方校合したことを意味する。

ところが、「写本」は初度本ではなく、親本を指すとしたらどうであらうか。その場合、上巻は校合せず書写し、それが再写本にも継承されてゐる、と解することができる。つまり、「写本」が初度本を指すのか、それとも親本を指すのかによつて、解釈は一変するのである。それでは「写本」は初度本と親本、どちらのことを指すのであらうか。

ここでは正徹の表現方法に着目したい。正徹筆の「つれ／＼種」の中で、「写本」と記された箇所が一箇所ある。それは、下巻の第一五一段にある「写本云此段本ハみせけちなれとも私記之」といふみせけち私注である。しかし本段みせけち私注は、静嘉堂文庫本以外にも、天文本、陽明文庫本、落合本、蓬左文庫本、中田本等有してゐることから、本段注記は他のみせけち私注よりも早い段階で記されたみせけち私注であることが推察される。これは、正徹が親本とした写本よりも更に前に遡及しうるものである。

よつて、正徹が「つれ／＼種」に記した「写本」といふ文言は、上巻奥書の「写本云」を除けば存しないといふことになるわけだが、「写本」が少なくとも初度本ではない、といふことを示すことは、次の奥書の文言から導ける。

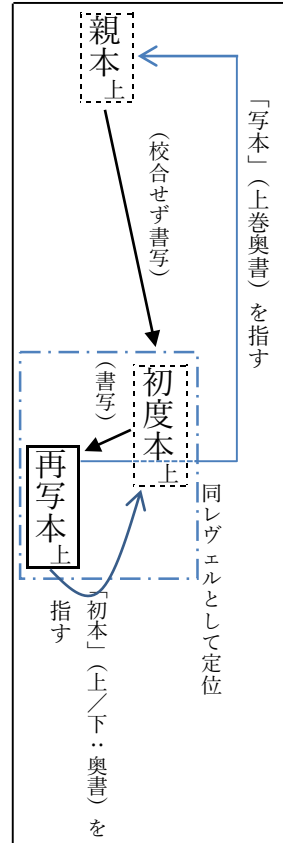
正徹が「或仁」に「与進」した本、すなはち初度本のことを正徹

が指し示す場合には如何にして記してゐるかといふと、上巻奥書では「初本」、下巻奥書では「初書写之本」としてゐる。つまり正徹は初めて自身が「つれ／＼種」を書写した本を、「初メノ本」と表現してゐるのである。正徹がこういった書き分けを行つたのは、“正徹が書写するに際し底本とした親本”と“或仁”に与進した初度本“を、書写者である正徹自身の中で明確に区分けしてゐるからである。従つて、上巻奥書で記されてゐる「写本」とは、正徹が底本とした親本のことを指すと考へられる。

以上の考察を踏まえると、【図1】で示すやうに、正徹の意識下では、初度本と再写本は同レヴェルのものとして捉へ、書写した初度本を通じて、「写本」を親本に定位してゐたものと考へられる。奥書には決して初度本の時点で「そのまま書写した」などとは記されてをらず、あくまでも初度本を底本にして再写本を成立させる際に「如写本書之而已」とあるに過ぎないわけであるが、この「写本」は先に示した如く「親本X」を指してゐると考へられるため、再写本は親本Xの同一にあることが推察される。従つてそれらの間を介してゐる初度本も必然的に親本Xと同等同質であると考へられるのである。更に、上巻奥書の記述から、本文の校合は上巻の本文では行はれてゐなかつたと考へられるため、静嘉堂文庫本の上巻は、親本の原形を、底本である初度本を通じて正徹が出来る限り正確に留めることに意を注いだ写本であることが想像せられる。

【図1】

※    は現存してゐる伝本、   は現存してゐない伝本、   は正徹の意識を示す。



なほ、上下巻の奥書をもとに、正徹の周辺と行動を時系列に並べ直すと、次のやうになる。

「不堪感餘」と感激し「つれ／＼種」を「書写」(上／下)

← 「則両三本之取合校以直付」(下)

← (一年三ヶ月後)

「或仁」から「つれ／＼種」を「所望」される(上／下)

← 「初本」を「重而書写」(上)／「初書写之本」を「重書写所也」(下)

正徹が「つれ／＼種」に触れたのはあくまでも「一見之次」であるし、初度本と再写本の間には三年といふ時間差もあることから、正徹が再写本を書写するときには既に手元には親本はなく、初度本

のみがあつたに相違ない。すなはち、再書写するに際し底本にした写本は、初度本であつたことが推察できる。(校合は下巻の再写本を以て初めて行はれたのではなく、初度本の段階から既に行はれてゐたことも同時にこの時系列から分かる。)

正徹が「つれ／＼種」を再書写するに際し、直接親本を書写したのではなく初度本を書写し、しかもそれが親本と同一のものであるといふことは、以上のやうに、奥書の解釈によつて説明できるのである。

#### 四―二、下巻奥書の解釈

下巻奥書によると、確実に校合してあると記されてゐる下巻本文には、校合の跡が見受けられない。桑原氏が述べるやうに、校合の跡が「完全には伝えられなかった」と解すとしても、下巻の本文に校合の跡が全く見られないといふ実態を鑑みると、その解釈にはやはり問題があるやうに思ふ。

それでは、どのような解釈ができるであらうか。それには以下の解釈が可能である。すなはち、親本を書写し且つ校合された初度本の下巻には、たとへば「イ」のやうな正徹による校合の書き込みが記されてゐたが、再書写するに際し、初度本にあつた校合の跡を、再写本では本文の中に取り込んだ――つまり再写本の下巻は、所謂「取り合はせ本」と解しうる。

連綿体として書写されるテキストにおいて、書写する際にその本文を細かいレヴェルで瞬時に正しい本文に書き直すといふ行為は、

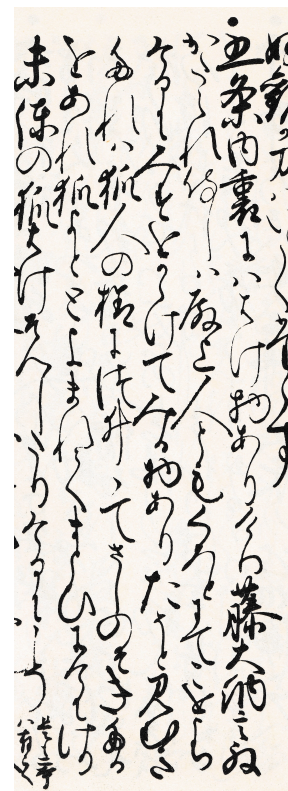
予め下書き等をした上で書き写すといった前段階を踏まへなければ、事実上難しからう。しかし、下書きを予め書いておさへすれば、細かい部分でも訂正しつつ書写することは可能となる。今回の問題に当てはめれば、初度本がその下書き的機能を果たしたのだらう、そして結果として本文の校合跡が見られない「取り合はせ本」としての再写本が誕生した、と考へたい（無論、初度本を「与進」された「或仁」は、正徹による校合の跡が残ったテキストを保持してゐたといふことになる）。

下巻本文が「取り合はせ本」であることは、「両三本」の解釈を通してでも推察できる。「両三本」とは、川瀬氏が静嘉堂文庫本を翻刻して以来、「二、三本」の『徒然草』諸本を取り合はせ校合したと解されてゐる<sup>(13)</sup>。「両」はたしかに数量としての「二」を想像しうるし、「二、三本」と解釈することで特別な矛盾が生ずるものでもない。

正徹が「つれ／＼種」を再書写したのは、初度本を書写校合してから既に一年以上が経過してゐたことから、記憶が曖昧になり、校合本の正確な数を失念してゐたのではないかと考へられなくはないが、第二三〇段のみせけち私注「是も二本ハ有之」の「二本」が、正徹による書き入れであつたならば、静嘉堂文庫本の中で正徹が校合本の具体的な数について触れてゐることから、奥書で「二、三本」と曖昧な表現にすることは到底受け入れ難い（第二三〇段のみせけち私注が正徹による書き込みであらうことは、別稿に委ねる）。

初度本は、下巻奥書にあるやうに、「取合」せて「直付」された本であるからして、「両三本」が意味するところは、初度本一本と校合本二本の計三本であると解釈でき、すなはち下巻は「取り合はせ本

”だといふことが改めて分かるのである。



（三八丁ウ）

※第二三〇段「五条内裏にハ」末尾には、みせけち私注「是も二本ハ有也」とある。

## 五、奥書から想定しうる事象

### 五―一、伝本の一系譜

静嘉堂文庫本の上下巻が各々有する正徹奥書の解釈を試みてきたが、それらをもとに、正徹奥書から想定しうる静嘉堂文庫本の伝来とその系譜の可能性の一つを、以下に提示する。

永享元年、正徹は『徒然草』と邂逅し、感動の余り（「不堪感餘」）一二月頃に書写することとした。そして、書写した一本を他本と校合するために、校合本二本を取り合はせて校合した（「則両三本之取合校以直付畢」）が、それは下巻のみ校合し、上巻には校合せずに親本のままの状態を保たせたものであつた。正徹はそれを自身の手元に置いておいた（『初度本の成立』）。その後まもな

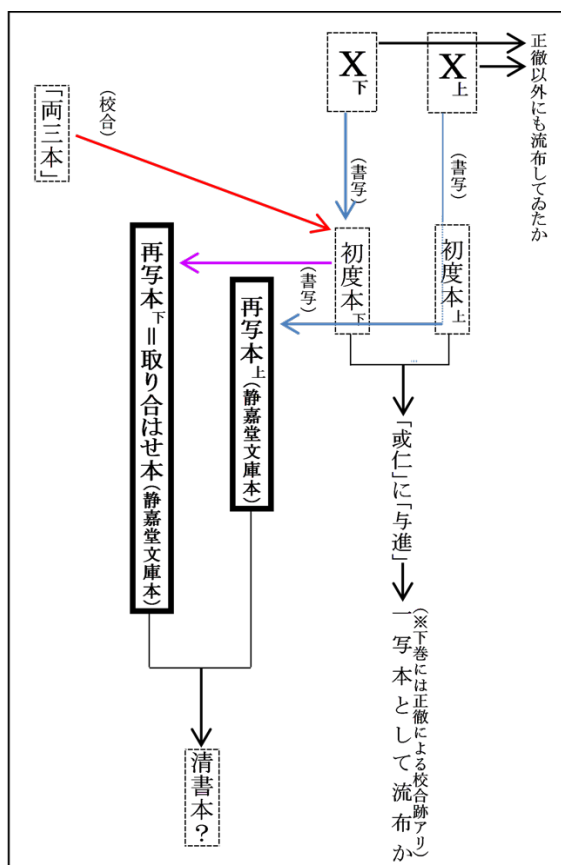
く、上下巻の親本Xを持ち主に返却する運びとなつた。

ところが一年三ヶ月後の永享三年、「或仁」から『徒然草』の所望を受けたため、再度重ねて初度本を底本として書写することとした。再度書写するに際し、元々手を加えてゐなかつた上巻はそのまま（上巻奥書「如写本書之而已」）、つまり底本である初度本ひいては親本Xをそのまま引き継ぐ形で書写した。一方初度本の下巻には、正徹による「両三本」との校合の痕跡があつたため、再書写するに際し、校合を本文中に取り込むことで「取り合はせ本」として完成せしめた。校合の痕跡がないのはこういう背景によるものである。そのやうにして、正徹は初度本を書写して再写本を完成させた後、「或仁」に初度本（上巻奥書「初本」／下巻奥書「初書写之本」）の『徒然草』を与へ進めた

このやうに考へると、【図2】の如き『徒然草』の系譜が想定しうる。

【図2】奥書から想定しうる伝本の系譜

※ ☐ は現存してゐる伝本、☐ は現存してゐない伝本を示す。



## 五―二、『徒然草』分冊独立生成過程論

前節ならびに前項にて、正徹奥書の解釈と新たな伝本の系譜を提示したが、「なぜ静嘉堂文庫本には、上下巻に奥書が記されてゐるのか」といふ疑問が残る。これまでの考究から推察すると、上下巻各々の成立過程が異なることに起因する点は明白である。すなはち、上巻はそのまま書写され、下巻は校合を取り込むことによつて「取り合はせ本」となり、上下巻は「取り合はせ」的性格を帯びてゐるといふ点で、各々の成立過程が異なると考へることができる（正徹が「一

見」した親本Xの『徒然草』の上下巻はそもそも伝来が異なるものであった場合にも上下巻の成立過程が異なる、と言へる。さういつたことも一つの要因ではあるかと思はれるが、ここには室町期における『徒然草』の流布に関連する根源的な問題が内包されてゐるやうに思ふ。

本来「奥書」とは、その字の如く、書誌の「奥」、つまり最後に「書」かれるものである。二帖が当初から一具のものと意識されてゐたのであれば、当然、二冊目（『徒然草』ならば第一三七段より始まる下巻）の最後、すなはち書誌全体の「奥」にその書写事情・来歴を書くのが、通常の在り方であらう。しかし、『徒然草』の諸伝本の奥書を見てみると、静嘉堂文庫本を含め、たとへば以下の室町期成立とされる諸本においても、同様の現象が生じてゐる。

#### 【正徹本系統】

- ・ 静嘉堂文庫蔵正徹筆本
- ・ 龍谷大学図書館蔵平忠重筆本

#### 【常縁本系統】

- ・ 阪本龍門文庫蔵徳大寺公維写本〔〇九四〕<sup>(14)</sup>

静嘉堂文庫本のみならず、他の写本においても同様の現象を生じさせる原因とは何であらうか。結論から述べれば、『徒然草』は、「つれ／＼なるままに」の書き出しで始まるのが上巻、「花は盛りに」の書き出しで始まるのが下巻といふ認識は、現在のやうに常識的なものではなく、当時は上下巻揃で『徒然草』といふ作品である、とい

つた認識に必ずしも立つてゐたわけではなかったからだと思はれる。たとへば、室町期における古記録には『徒然草』の存在を示す史料がいくつか存するが、中でもその帖数が記してあるものに、『多聞院日記』と『後法興院記』とがある。

『多聞院日記』（竹内理三編『續史料大成』第三八巻〔臨川書店、一九七八〕）

ツレツレ草二帖在之、兼幸法印作云々（永禄九年五月二〇日）

『後法興院記』（竹内理三編『續史料大成』第七巻〔臨川書店、一九七八〕）

自武家ツレツレ草ノ雙紙二帖返給（明應八年四月二九日）

両史料にある「ツレツレ草（ツレツレ草ノ雙紙）二帖」は、上下巻を示した二帖の意であらうし、他の諸伝本の現存状況を鑑みても、上下巻の二帖一揃が一般的な形態である。しかし、『徒然草』は中世では文学的位置づけが困難であり、積極的に貴重な書物として捉へられてゐなかつたであらう<sup>(15)</sup>といふこともあり、上下巻といふ枠組みに捉はれることなく、各人の求めに応じて書写行為がなされた結果、（無論、時の経過で上下巻がばらばらになることはあつたにせよ）上巻のみの本として読まれた『徒然草』と、下巻のみの本として読まれた『徒然草』の流布といふ状況が生じたのだらう。『徒然草』は内容面から見ても、『源氏物語』などの長編物語とは違い、異なる帖から読んでも話が繋がらないだとか、話を跨いでゐるといふこともないため、『徒然草』は一帖で完結してゐると思はれても不思議では

ない。

畢竟、『徒然草』が上下巻の二帖で一揃であるといふ認識が常にあったならば、奥書は下巻にのみ記されるはずであるが、上下巻ともに奥書を有するといふことは、つまり、上巻と下巻は二冊揃で成立したが(そもそも兼好が上下巻を一具のものとして流布せしめたかについては存疑)、当時の人々の認識上、必要に応じて書写されたため、結果として、①上下巻二帖一揃が『徒然草』である、②(下巻の存在を認知してゐないため)上巻のみが『徒然草』である、③(上巻の存在を認知してゐないため)下巻のみが『徒然草』である、といふ三通りの認識が室町期では生じてゐた、といふことが考へられやう。更に、時代が下り『徒然草』が次第に流布するにつれて、②と③は淘汰されていき、次第に①へと収斂していつたものではなからうかと夢想する。

これを裏付けうる証左として、②龍谷大学図書館蔵平忠重筆本と、⑫八坂神社蔵本・⑬東洋文庫蔵岩崎文庫旧蔵本を提示したい。

まづ龍谷大本は、上巻のみの写本で、平忠重による奥書が附されてゐるのだが、その題簽には「つれく草写本全」とあり、「上」などは併記されてゐない。これは、上巻のみで成立してゐたことを示してをり、書写である平忠重は少なくとも、もう一冊の下巻があることを認知してゐなかつたのであらうことを示唆してゐる。

八坂神社本・東洋文庫本は、慶長期成立と見られる写本であるが、上巻が正徹本系統であり、下巻が幽齋本系統である<sup>(16)</sup>。両本は、上下巻別個で成立してゐた写本が、無作為に収斂された結果なのではなからうか。

## 六、をはりに

今日まで、上巻と下巻、二帖ある静嘉堂文庫本「つれく種」といふ作品を一括りで考へてきた。しかし、正徹の奥書に従ひ、静嘉堂文庫本の特徴と照らし合はせることで、次の四点の可能性あることを示した。

(一)上巻は、親本の原形を、底本である初度本を通じて正徹が出来る限り正確に留めることに意を注いだ写本である。

(二)下巻は校合を本文に取り込んだ「取り合はせ本」である。

(三)上下巻といふ括りもまた、明らかに性格の異なつた、「取り合はせ」的性格を有する。

(四)他の室町期における諸伝本の書写奥書の実態から、『徒然草』は二帖一揃である」といふ認識は常にあつたわけではなく、そもそも兼好自身もそのやうに認識し、流布せしめてゐたかは不明である。

正徹が上巻を校合せずに下巻のみ校合したことに関しては、やはり未だ疑念の余地があるが、正徹がさうせざるを得なかつた背景には、『徒然草』を書写する際の伝来と、『徒然草』といふ作品に対する認識が、その要因として関係してゐるやうに付度されるのである。

## 《注》

(1) 静嘉堂文庫蔵「つれく種」の筆跡について、次田潤氏の「本文の書風は、



正徹の右筆法橋玄津のそれに酷似して」ある（次田潤「正徹本 つれぐ草」『文学』一九三一・八）といふ指摘があるが、「宮崎半兵衛所蔵の書状、近頃、佐々木信綱博士の蔵に歸した拾遺愚草、又は、猪熊信男所蔵の書状、北川清所蔵の自筆和歌集（以上二書は寫眞に據る）等と併せ見ても明確である。」（川瀬一馬『徒然草壽命院解説』（松雲堂書店、一九三一）、「川瀬氏の見解は、一般にひろく指示されていると見てよいであろう。」（桑原博史『徒然草研究序説』（明治書院、一九七六）、「下冊奥書の署名「非人正徹」と第一〇六段の「非修非学」（42丁表）の字体の一致などから見て、本文と奥書は同筆である」（齋藤彰『徒然草の伝本』（『国文学 解釈と鑑賞』一九八七・一一）↓齋藤彰『徒然草の研究』（風間書房、一九九八）、一四頁。引用ハ後者ニヨル。）と言はれるやうに、正徹筆と見るのがよいやうに思ふ。

- (2) 大妻本は、正徹本の章段配列と同じであること、また通行本第二二三段に当たる「たづの大臣殿」の章段が第四六段に続け書きされてゐることを理由として、正徹本系統の一本とした。しかし、稲葉二柄氏の「大妻女子大学図書館蔵『徒然草』（永禄六年写）の書誌」（『大妻女子大学紀要 文系』三四号、二〇〇二・三）によれば、本文校異の状況が幽斎本系統の河野本と82・8%一致してをり、河野本含む幽斎本系統の数本が有する「兼好法師詠自讃歌」も有してゐるといふ。従つて、正徹本系統と幽斎本系統の中間的位置に属すると考へるのが適切なものかもしれない。本写本に關しては、大妻女子大学国文学会編『徒然草』（新典社、二〇一一）の解説に詳しい。
- (3) 落合博志氏のご教示による。なほ、従来では「令」ではなく「之」としてゐる。

- (4) 川瀬一馬『徒然草壽命院解説』（松雲堂書店、一九三一）、二二頁。

- (5) 明恵、高信、照蓮らによる「非人」の表現は以下の通りである。史料の検索には、「東京大学史料編纂所データベース」を用ゐた（傍線、私意）。

↓ <http://www.vap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/db.html>

- 『佛光觀略次第』（高山寺所蔵） 佛光法界觀行者非人高辯  
「明恵上人歌集」（岩崎文庫所蔵） 遺弟非人高信  
「華嚴經疏演義鈔識語」（高山寺所蔵） 華嚴宗非人高辯記之、  
『解脱門義聽集記』（金沢文庫所蔵） 非人高信／先師遺法非人高信  
『明恵上人集』（文化廳保管） 遺弟非人高信  
『法鼓臺聖教目錄』（高山寺所蔵） 非人照蓮<sup>卅六</sup>  
(6) 堀部正二「定家自筆本土左日記流傳小史」（『中古日本文学の研究——資料と実証——』、教育図書、一九四三）  
(7) 鈴木知太郎『徒然草諸本解説』（山田孝雄『つれぐ草』宝文館、一九四三）、四一〜四二頁。  
(8) 桑原博史『徒然草研究序説』（明治書院、一九七六）、二〇四頁。  
(9) 吉田幸一「常縁本つれぐ草私考——常縁本の祖本はつれぐ草の原形本か——」（『つれぐ草 常縁本』第一四九冊〔古典文庫、一九五九〕、一〇二頁。  
(10) 大西善明『正徹本つれぐ草』解説（日本古典文学刊行会、一九七二）、二九頁。  
(11) 大妻女子大学国文学会編『徒然草』（新典社、二〇一一）の影印によれば、大妻女子大学蔵本には、校合だけでなくみせけち私注の跡も見受けられない。これは本文が河野本とほぼ一致してゐるが故か。  
(12) (8) 前掲書、二〇四〜二〇七、及び二二二頁。従来、神宮文庫本は「本ノ」

として静嘉堂文庫本上巻の奥書が伝えられてゐることから、静嘉堂文庫本の伝写ではなからうかと言われてきたが、桑原によると、章段の区切りに関し、「正徹本では統合しているものを神宮文庫本では二段に区切っている箇所がある。（中略）これらは、正徹本においては完全に統合されてしまっている箇所であつて、神宮文庫本が正徹本を転写したのでは生じ得ない現象である。」、また第二一段の誤脱を含む文章に関し、「他系統の本と共通している二〇字を越える本文が神宮文庫本にあり、正徹本ではそれを誤脱しているかぎり、両本の間に親子関係を考えることは不可能である」と反論してをり、その指摘に反論の余地はなからう。

- (13) 『徒然草』を上下巻二帖で一部と数へるのが一般的だからであらうか、今日まで「両三本」を一帖として数へてゐるのか、上下巻合はせて一部として数へてゐるのかについての言及はなされてゐない。現在までに室町期写とされる『徒然草』で一冊完本としてある写本は存しないため、後者のやうに理解してよいかと思ふ。しかし、慶長期前後には、静嘉堂文庫蔵松井簡治氏旧蔵本や伝連歌師友理筆異本徒然草（『弘文莊待賈古書目15』（一九三一・六）のやうに、上下巻二揃の完本としての『徒然草』が既に成立してゐるし、陽明文庫蔵『徒然草』古鈔本（『枕草子 徒然草（陽明叢書国書篇）』（思文閣、一九七五））や桃園文庫蔵藍表紙本といった抄出本の様相を呈した写本、更には三巻本の『徒然草』（小松操「参巻本の『徒然草』伝本」（『ぐんしょ』一九六二・九））などが存在するため、必ずしも断定しうるものではない。
- (14) 阪本龍門文庫善本電子画像集「徒然草」（二〇一七年二月二日、閲覧）  
→ <http://mahoroba.lib.nara-wu.ac.jp/y05/html/094/>

- (15) 小西甚一氏は、『徒然草』が「当時、きわめて新しい作品」であつた（小西

甚一『日本文芸史Ⅲ』（講談社、一九八六）と評価付けてゐる。稲田利徳氏は「随筆というジャンルの共通認識さえも充分でなかった」公家たちにとって「徒然草」は焦点の判然としない、雑記的な書物であり、「教養書としても、宗教的な説教書としても、また、文学作品としても、どれか中途半端な位置しか占めない「徒然草」が、広く人々に迎えられて流布してゆくことは困難」であつたとして、「当代の人々がそれを正当に評価できなかった」といふ見解を示し、小西氏の評価に同意を示してゐる。（稲田利徳「徒然草の享受はなぜ遅れたか」（『国文学 解釈と教材の研究』一九七七・九）→『徒然草論』（笠間書院、二〇〇八）、五二〇～五二二頁。引用ハ後者ニヨル。）

- (16) 高乗勲『徒然草の研究』（自治日報社、一九六八）、五二〇～五三六頁。

#### 「付記」

本稿を作成するにあたり、ご助言や資料の提供及び本稿への掲載を快諾して下さいました石澤一志氏、落合博志氏、日比野浩信氏に厚く御礼申し上げます。

（こえだしゆん／埼玉大学大学院 博士前期課程）